清少納言 二 全五ノ

WA 7
141
2

東京圖書館
和書門
和文類
別つを函
三五架
68
三一號
五冊

雅成

帝國圖書館藏

故柳原芳楚納本

柳原家藏

集は
古万葉集　古今　後撰
哥題は
みやこ　くすみくりこまあられさゝつほすみれひかけ
こもたかせをしあさちしはあをつゝらなしなつ
めあさかほ
草の花は
なてしこからのはさら也やまとのもめてたしをみなへし
きゝやう菊乃所〻うつろひたるかるかやりうたう
はえたさしなともむつかしけれとこと花ともみな霜かれた
るにいとはなやかなるいろあひにて
さし出たるいとをかしまたわさとゝりたてゝ人めかす
へきにもあらぬさまなれとかまつかの花らうたけ

ガラス使用

なる名そうたてあなるかりのくる花とそもしにかきた
るかにひの花色はこからねと藤の花にいと
よくにて春と秋とさくかをかしきなりとす
みまれなしやうれ摘そうしおいそいけれおしなと
うしもをつけは夕かほはあさかほににていひ
つゝけたるにをかしかりぬへき花のすかたにてふく
みのありさまこそいとくちおしけれなとてさはたおひい
てけむぬかつきなといふものゝやうにたにあれかし
されとなほ夕かほといふ名はかりはをかしあしの花
はさらに見所なけれとみてくらなといはれたるこそあら
らん人あらしと思ふにたゝなるはいとすさましきな
をとらしと秋の野にすくれてしうあそはめとれ
かゆすゝきをいれぬいとあやしと人はいふめり
秋の野をしなへたるおかしはすゝきこそあれ
ほさきのすはうにいとこきか朝きりにぬれてうち
なひきたるはさはかりの物やはある秋のはてそいと
見ところなきいろいろにみたれさきたりし花のかたちも
なくちりたるに冬のすゑまてかしらのいとしろく
おほとれたるもしらてむかし思ひ出かほに風になひきて
かひろきたてる人にこそいみしうにためれよそ
ふるこゝろありてそれしもこそあはれともおもふへけれ
萩はいと色ふかう枝たをやかにさきたるか朝露
にぬれてなよなよとひろこりふしたるさをしかは
わきてたちならすらむもことなるかはふひそ
やへ山ふきて見るこそ孫と同しけれしてさうひらかさ
ふくらんそなへての草木は花とも覚えてたゝしな

花の色こからねと山吹ににていとをかし
あとなる事なけれどたちりそ見ゆるとよまれたる
はそうふかしさうひはちかくて枝のさまなとはむ
つかしけれとをかし雨なとはれゆきたる水のつら
くろ木のはしなとのつらにみたれさきたる夕はえ

おぼつかなき物

十二年の山こもりの女おやしらぬ所にやみなるに
いきたるにあらはにもそあるとて火もとも
さてさすかになみゐたる今出きたるものの心もし
らぬにやんことなき物もたせて人のもとにやりたるに
おそくかへる物またいはぬちこのそりくつかへり人
にもいたかれてなきたるくらきにいちこくひたる
人のかほしらぬ物見

たとしへなき物

夏と冬とよるとひると雨ふると日てるとわかきと
老たると人のわらふとはらたつと黒きと白きと思ふ人と
にくむとあゐときはたとあめときりとおなし人な
からも心さしうせぬるはまことにあらぬ人とそおほ
ゆるひと水とこえたるやせたるよからすのゐて夜中
はかりにいねさはくをちまとひ木つたひてね
おひれたるこゑになきたるこそひるのめ
にたかひてをかしけれしのひたる所にありては夏
こそをかしけれいみしうみしかき夜のいとはかなく
明ぬるにつゆねすなりぬやかてよろつの所あけなから
あれはすゝしう見わたさる猶いますこしいふへき事
のあるをかたみにいらへなとするほとにたゝ

るほとにまへよりからすの高くなきていくこそいとけさやかなるものからをかしけれ又冬のいみしうさむきにうつもれふしてきくに金乃をとのたゝ物のそこなるやうにきこゆるいとをかし鳥のこゑもはしめは羽のうちになくか口をこめなからなけはいみしう物ふかくとをきかあくるまゝにちかくなるまゝにきこゆるもをかしけさう人にてきたるはいふへき事にもあらすたゝうちかたらふも又さしもあらねとおのつからきなとする人の簾の内にあまた人ゝありて物なといふにゐいりてとみにかへりけもなきを郎等ともなる小舎人わらはなととかくさしのそきけしきみるにをのゝえもくちぬへきやうふうらぬへめてみそかにとおもひていふらめともあなわひしほんなうくなうかな夜は夜中になりぬらんなといひたるいみしう心つきなしかの云ものはともかくもおほえすこのゐたる人こそをかしう見えきこえつる事もうするやうにおほゆれ又いろにいてゝはえいはすあなとたかやかにうちいひうめきたるも下ゆく水のといとほしたてしとみすいかいなとのもとにて雨ふりぬへしなときこえこつもいとにくしよき人君なとのともなるこそさやうなるをはたゝ人なとのさそあるあまたあらん中にも心はへ見てそゐてあるへき人なむ

ありかたき物

しうとにほめらるゝむこ又しうとめに思はるゝよめの君毛のよくぬくるしろ金の毛ぬきしうそし

ガラス使用

経ぬ人はすさまじくせゝこをなくてかゝちも流
はわさ海をもくまて世にあるかといさくりのさまを
なき人は哀しあれはれなむ人のかくをにちかゝりし
ぞかしと思ふまつ身に見えしそかさけまし物語のこゑ
なとをさうるはたえりこえ清あれぬしくらきなくし
なとをいうしを仏しそうけともあかれあそさきかな
あまなるめ男女を清涼をちきりかゝくてかさ
らふ人のすゑまて中よきあと清らひよさきあむさう
い祈りうらせうるりあふめそさと見えてなとせ
うちつか孫をかそ斎いのみしうれりしかゝれあし堂
見あけまを風いしう吹入ゝ葉をいせ涼し冬を雪
あゝ禮なとれゝ殺まあくひて入まゝをいせれりし
世をくてわりを人なとれのかゝゐさうゝあ河し久れ

ひやうぬいうしろなと毎かくしさへまきぞあと
あかのやうにおもひたのをわらひなとをせそいとよ
ひ床なともたゆまれ仏清らひせゝ禮す床なさまし
てはしりうらとく為くをなきりいせれりしお世
かはの香乃庭一よ字ゆるりとまゐてうてたまひ一
ちゝくさうそれ人なくてとふと志ゐあそれたうし
けまいとひさしをたくく小香せぬを孫いりふ久床
とや思ふらん孫ゝてすあしよりし深くをときぬのあ
たひをさかえと思ふらんりし河ふきなと清ら姫を
ちゝし冬ハ火おけりやなをも炭火さし乃をと
志あひまゝと字ゆる蔵いとくたくきまさゝ愛すく
をいふ身りけなりには高ゝまりてきくたわをあり
又あまさめ祭りくして舞なとさふよ出くう度と

まつあけたれはこゝへとしも思はぬ人もたちとま
りぬゐるへきやうもなくてたちあかすもをかしけ
みすのいとあをくをかしけなるに木丁のかたひら
いとあさやかにすそのつますこし見えたるになを
しのうしろにほころひたえすきたる君たち六位蔵人
のあを色なときてうけはりて遣戸のもとなとにそ
はよせてえたゝてられ屏のまへなとにうしろを
しつけてそてうちあはせてたちたるこそをかしけれまた
さしぬきいとこうなをしあさやかにていろ／＼のきぬ
ともこほしたる人のすたれをゝし入てなから入たるやう
なるもとよりみるはいとをかしからんをいときよ
けなる硯ひきよせてふみかきもしは鏡こひてみ
なをしなとしたるはすへてをかし三尺のきちやう
をたてたるにもかうのしもはたゝすこしそあるこ
なたそ殿人うちにゐたる人とものいふかかほのもと
にいとよくあたりたるこそをかしけれたけのたか
くみしかゝらん人なとやいかゝあらむなをよの
つねの人はさのみこそあるまして臨時の祭のてうかく
なとはいみしうをかしとのもりのつかさの官人なとのなかき
まつをたかくともしてくひはひき入てさきはさし
つけつはかりなるにをかしうあそひ笛ふきたてゝ心
ことにし思ひたる君たちの日のさうそくしてたち
とまり物いひなとするに殿上人のすいしんとものの
さきをしのひやかにみしかくおのか君とものれうに
をひたるもあそひにましりてつねにゝすをかしう
きこゆなをあけてかへるをまつに君たちのこゑ

みそあらたにおふるとみ草乃花うたひたるこのたひ
はいますこしおかしきにいかなるまめ人にかあら
むすく〳〵とさしあゆみていぬるもあれはわらふを
しはしなといへとこゝちなとやあしかりけんたう
れぬはかりもし人やおひてとらふると見ゆるまてま
とひ出るもあめりしきの御さうしにおはします頃
こたちなとのはるかに物ふりやのさまもたかう
けうとくすゝろにおかしうおほゆもやはおにあり
とてみなみへへたて出してみなみのひさしに御木丁
たてゝまたひさしに女房はさふらふこのゑの御門
よりさゑもんのちんに入給かんたちめのさきとも
殿上人のはみしかけれはおほさきこさきとつけてみなき
しるまてそれそかれそなといふに又あらすなといへは
人して見せなとするにいひあてたるはされはこそ
なといふもおかし有明のいみしうきりわたりたる
庭なとにおりてありくをきこしめして御前にも
おきさせ給へりうへなる人をみなおりなとしてあ
そふにやう〳〵あけもてゆく左ゑもんのちんにまかりて
見んとてゆけはわれも〳〵とおひつきてゆくに
殿上人あまたこゑしてなにかし一声の秋とすんして
入おとすれはにけ入て物なといふに月見給ひ
けりなとめてゝうたよむもありよるもひるも殿上人のた
ゆるよなし上達部まうて来ておほろけに
いそくことなきはかならすまいりたまふ

あちきなきもの

わさと思ひたちてみやつかへに出たる人のものう

ガラス使用

かりてうるさけに思ひたる人にもいはれむつかしき事もあれはいかてかまかてなんと云事くさをして出て、おやをうらめしけれはまゐりなんと云よめりこれかみそてさけなる。しふ〱に思ひたる人をしのひてむこにとりて思ふさまならすとなけく人

いとほしけなき物

人によみてとらせたる歌のほめらるゝされとそれはよしとをきありきする人のつき〱えんたつねて文えんといはすれはしりたる人のかりなほさりにかきてやりたるになほいさゝかありとえうからく色事をとりせてむとくにいひなしける

心ちよけなる物

うつえのほうし神楽人ちやう池乃蓮の村雨にあひたる御りやうゑの馬おさまた御りやうゑのふりはた

したり顔なるもの

くゝ御の小馬除目に第一の國えたる家人御佛名の朝ちこくゑの御ひやうふとりわたして宮御らんせさせ給ひしうゆゝしき事かきりなしあまた見んよりしと仰らるれとさらに見侍らしとてゆゝしさにうつふしぬ雨いたうふりてつれ〱なるとて殿上人うへの御つほねにめして御あそひあり道方少納言琵琶いとめでたしなりまさの君のさうのこと行よし笛つねまさの中将のふえなどいとおもしろしひとわたりあそひて琵琶を引やみたるほどに中なこん殿のひはのこゑやめて物語せん事おそし

といふことを誦し給へりしにかくれふしたりしをおきさわぎ侍ることぞつみしつれど物のめでたさはえやむなしとてわらはるゝあうなどもよくまいらうゆるさるゝとたちのこしくはらに侍くまいらうやうなりし頭中将のすゞろなるそらごとをきゝていみじういひおとしなにしに人と思ひけんなど殿上にていみじくなんの給ふときくもはづかしけれど誠にもあらばこそ侍らめおのづからきゝなをし給ひてんなどわらひてあるにくろどのまへなどわたるをりもこゑなどするをりは袖をふさぎてつゆ見おこせずいみじうにくみ給へばともかくもいはずに見もいれですぐす二月つごもり比雨いみじうふりてつれ〴〵なるに御ものいみにこもりてさすがにさう〴〵しくこそあれ物やいひやらましとなんの給ふと人ゝかたれどよにあらじなどいらへてあるに日一日しもにゐくらしてまいりたれば夜のおとゞにいらせ給ひにけりなげしの下に火ちかくとりよせて扁をぞつくあなうれしやとくおはせなど見つけていへどすさまじき心ちしてなにしにのぼりつらんとおぼえてすびつのもとにゐたれば又そこにあまたゐて物などいふになにがしさぶらふといとはなやかにいふあやしくいつのまに何事のあるぞとゝはすれば主殿司なりけり只こゝもとに人づてならで申すべき事なんといへばさしいでゝとふに是頭中将殿の奉らせ給ふ御返りことゝくといふにいみじくにくみ給ふにいかなる文ならんと思へどたゞいまいそぎ

見るへきにもあらねはいね今きこえむとてふところにひき
入ぬといひぬなほ人の物いひなときくすなはち
たちかへりてさらはそのありつる文給はりてこと
なん仰らるゝとく〳〵と云はあやしいせ物語也
とて見れはあをきうすやうにまんなりいときよ
けにかきたまへり心ときめきしつるさまにも
あらさるとらんせいの花の時錦乃帳乃もとゝ書
てすゑをいかに〳〵とあるをいかにかはすへからん御
前のおはしまさは御らんせさすへきをこれかすゑ
しりかほにたと〳〵しきまんなかきたらんもいと
見くるしなと思ひまはすほともなくせめまとはせは
たゝそのおくにすひつのきえすみのあるして
草のいほりを誰かたつねむとかきつけてとらせ
つれと返事もいはてみな寝てつとめていとゝく局
におりたれは源中将の声して草のいほりや
ありやとおとろ〳〵しうといへはなとてかさ人け
なき物はあらんたまのうてなともとめ給はましかは
いらへてましといふあなうれししもにありける
よ上にてたつねんとしつる物をとて夜部ありし
やう頭中将のとのゐ所にてすこし人ゝしきかきり
六位まてあつまりて万の人のうへむかしいまとかたり
出ていひしついてになほ此物むけにたえはてゝこそ
さすかにえあらねもしいひ出る事もやとまてといさゝかなにと
もおもひたらすつれなきもいとねたきを今よひよし
ともさためきりてやみなんかしとてみないひ
あはせたりし[illegible]見るましとて入給ひぬ

ガラス使用

とて殿もりつかさのいひしかは又おひかへしてたゝ袖をとらへてとうさいをせさせすこひとりてもてこすは文をとりかへしせよといましめてさはかりふる雨のさかりにやりたるにいととくかへりきてこれとてさし出たるかありつる文なれはかへしてけるかとてうち見るにあはせてをめけはあやしいかなることそとてみなよりて見るにいみしきぬす人かなゝほえこそすつましけれと見さはきてこれかもとつけてやらん源中将つけよなといふ夜ふくるまてつけわつらひてなんやみにし事はかならすかたりつたふへき事也なとなんさためしといみしうかたはらいたきまていひきかせて今は名をいほをくさの庵となんつけたるとていそきたち給ひぬれはいとわろき名のすゑまて

あらむこそくちおしかりけれと云ほとに修理助のり光いみしきよろこひ申にうへにやとて参りたりつるといへはなそつかさめしあるともきこえぬになにゝなりたまへるそといへはいて誠にうれしき事のよへ侍しを心もとなくおもひあかしてなんかはかりめんほくある事なかりきとてはしめありける事とも中将の語給ひつる同し事をいひてたゝ此返事によりてこさうひくさ侍ゆりと侍ま思ひし也頭中将ののたまひしにたゝにてきたりしは中〳〵よかりきもてきたりしたひをいかならんとむねつふれてまことにあしく侍らむをせうとのためもわろかるへしと思ひしになのめにたにあらすそこらの人のほめかんしてせうとこちきねとのたまひしかは下心には

ガラス使用

いせうれしけまとさやうにくこまをはうに思ふく
みんを海しき身になん給かと申しかもしくをたへ
きゝしまとゆを侍るに呉人にくさまとてきこゆる
そせの折ひしなんすあしくちかしむせうとの覚て
ふ給しかとあまたかもと清為和哥んる丹いふへまかやう
なしあと又気かむしとや君かきなといひあそを
まろき事いひてハゆゝしく孫さりはへしとて庚申
までなりんれたせしあまたを身かさあふを人のために
さけていそしむよ須こひ申を侍るにや清かさめしふ
かねいはかさえて侍らむをなふと思ふましをなむ
といふ為え第よあまさしてさる事あらむ覚志りて孫
あくをありゐり那あまたになんむ孫流ふれて於世
ゆるこれいあうきせうとゝいふ事しなきう為まて

こゝ為志語ししめし夜上ゆをつきさ名をへいひえてせう
とゝそつけせうの物語なとしてゐさかくにまいると
めしうまてまうてたるに此事作らせんとてうるまなり
うへのわたらせ給てかうかやうにさ様語てなのこた
こゝあ扇にかきてかうさ威と給らせにあそ侍さましう
なまれいえ隣なる事ゆかとおもえしかさそ後ふ
祉木下なとせうの登て思ひなは語めるましかへく
せしれ二月九日ありま志をの流さうしふ出させ
語ひし流ともふきいらて捨つかにのこまのたまし
又の日頭中将の世うそとてきのふれ秋くらまへ
まふてたましみあまひ方のあさりまて覚の為入り
なんゆくまうさあけさうむよ久りぬへしかかえいふ
へまなりたいゝをせうくりせくますとの給うしう覚

つほねに人りはなとてあるそこゝにねよとて御くしけ殿のめしたまへはまゐりぬひさしうねおきておりたれはよへいみしう人のたゝかせ給ひしからうしておきて侍りしかはうへにかさらはかくなんとのたまひしかともよもおきさせ給はしとてふし侍りにきとかたる心もなの事やときくほとにとのもりきて頭の殿のきこえさせ給ふなりたゝいままかつるをきこゆへき事なんあるといへは見るへき事ありてうへになんのほるそこにてといひてやりつ局はひきもやあけ給はんと心ときめきしてわつらはしけれは梅つほの東面のはしとみあけてこゝにといへはめてたくそあゆみ出給へる桜のあやのなほしのいみしうはなはなとうらの色つやなとえもいはすけうらなるにゑひそめのいとこきさしぬきに藤のをりえたおとろおとろしくおりみたりて紅の色うちめなとかゝやくはかりそ見ゆるしたひに白きうす色なとあまた重なりたりせはきえんにかたつかたはしもなからすこしすたれのもとちかうよりゐ給へるそ誠に絵に書物語の目出たき事にいひたるこれにこそはと見えたる御前の梅は西は白く東は紅梅にてすこしおちかたになりたれとなをおかしきにうらうらと日のけしきのとかにて人に見せまほし御簾の内にまいてわかやかなる女房なとのかみうるはしくこほれかゝりてなといひためるやうにていらへなとしたらんは見所ありぬへきにいとさたすきふるふるしき人のかみなとも我にもあらねはにや

ガラス使用

きらゝけひくたれてことあめとなほことなまはある
りなききあなるうすふひとゝをはそひねかんと思きぬ花
なとあまた露乃ち人とみえぬよりおもしまさ孫ん
めしきはうちまもりこそねをりこそ猶そとうひ
みくちおしけまた志きをなんまいふしとつけやある
いはかまへふなとの給さそても秋許ありしをえてく
さるところもなくてさいひてしかへすへからむとて月の
いみしうあかきに西の京よりくるまにつかへ孫と
たくみしろとりうしてゐをひまてをさ出たるし
きゝしよりそのまたかさなと語くわかひ給む春よ
あそ思ひうつりかしの那とさるの本にをさをきる
なとくよ御そあるまくんといとおもしをおりしくもはん
志りしあかて出給思とよわりし人をれのしう内は
いかなる人のならむと思ひぬへしおくれかさより
見いたされたらんうしろこそとにさる人やかなる
思ふましけまたくれぬまて来ぬ時まへふ人ゝ西へ
見はなとひめて物語のよきかしきまく身なとをそ
定いひし給ひをあしかりの苦くかあと有る時おかと
さと里ゑさうかうるこし係らまいけふきうけおもいはと
あとされかりのくてめわりてたいはれあ中さ絵きらふ
係らるそなといふ人を係りてはまん中ともち人たりえ
うりひまていとまろきゝ人ある時門の時むをめやを
えさ御といふ人をあのたてかさ人とふとえてされ
よなといよこれ車なとよりをいふ若しの歩つ
来見よりゐりとみましかそいりふめてまと君まし
笛こそ歩かゆきを給らりて出人ゝ梅まあとふ花より

そわう御かうしあそなどいふまつそれこそはけ
いさんとおもひて参りつるに物語のことにまき
れてとてありける事どもかうりやのしけきまさは誰も
まきなる見はべれどいとかくぬひたるいとはりめまで
やはとほしけるとてわらふ西の京といふ所はあはれ
なりつることもろともにみる人あらましかはとなむおほえつ
れかきなどもみなふるくこけおひてなどかたり
つれば宰相の君はかはらの松はありやといらへ
たりけるをいみじうめでゝ西の方都門をさる事い
くばくの地ぞとくちずさびにしつる事などかし
かましきまでいひしこそをかしかりしか里に
まかでたるに殿上人などの車もやすからずぞ人ゝ
いひなすなるいと有心に引入たるおほえ
はたなけれはさいはんもにくかるましよるもひるも
くる人をはなにしにかはなしなどもかゝやきかへさん
まことにむつましうなどあらぬもさこそくめれ
あまりうるさくもあれはこのたびいでたる所をは
いつくとなべてにはしらせず左中将つねふさの君なりまさ
の君などばかりぞしりたまへる左衛門のせうのりみつ
か来て物語などするにきのふ宰相の中将殿
のいもうとのあり所さりともしらぬやうはあらじいへ
といみじうとひ給ひしにさらにしらぬよし申しゝに
あやにくにしひ給ひしことなどいひてあること
あらがふはいとわびしうこそありけれほとほと
ゑみぬべかりしにわびてだいばんのうへにある
めのありしをとりてたゞくひにくひまぎらはして

かへちうきんにしはやしのくひ物やと人を見るらん
しさるをそれまてなんそことは申さすなりにし
わらひなましかはふようそかしまことにしらぬなめりと思
めしたりしもをかしうこそなとかたれは
さらになきこえ給ひそなといひくいひて日ころ久しう
なりぬ夜いたくふけて門をいとおとろしくたゝけ
はなにのかく心もなくとをからぬ門を高くた
らんときゝてとはすれは滝口なりけり左衛門の
そうのとて文もてきたりみなねたるに火とり
よせて見れは御と経の結願にてさいしやう
中将の御物いみにこもり給へりいもうとのあり所
申せ申せとせめらるゝにすちなしさらにえかくし申
ましさなんとやきかせ奉るへきいかにおほせにしたか
はんとそいひたるを返事をかゝてめを一すんはかり
かみにつゝみてやりつさてのちきて一夜せめ
てこゝはまさくすゝろなる所々にゐてありきてまめ
やかにさいなむにいとからしさてとかくを御
返事はなくてすゝろなるめなとつゝみて給へりし
はうまやといふまあやしのつゝみ物や
人のもとにさる物つゝみてをくる人やはある
かをなのさるをえぬ物と見るかにくけれは物もいはて硯
のあるかみにかきて
かつきするあまのすみかをそこなりと
ゆめいふなとやめをくはせけん
かきてさしいたれは歌よませ給へるかさらに見
侍らしとて扇かへしてにけていぬてうかさみに

ガラス使用

うしろ見りさらひなども猶中に何事ともなくて
まあし中かしこの里まうる法文打こ勝さりひん
あれしく侍りともちぎりきこえしるすてたま
もそよそうそよ侍るそかとも見給へ宮いひよりては
ふいに車しきものまゝにたかやさうん人もあなとよそて
えほそましきさへて何さうふきとなん行りふへ文
とやかきる里座りて絶なんと聞ありん時さるあとを
いへといひしうをいふしに
くらきほとるいとをのや庵乃中なるは
さうにかしの川と多よ見し
宮いひやわたりしを徽にみえや殿上人を
きほさそかうふりえてと我さ何ふこのとけなとい
ひしりえふくしてあそ座こみしり

梅のはなのまへさうせりかなる梅
はかなき海をなくかみくりのいふこゝちまゆ思く梅
そのほか花衆門乃ちんよりいふてて乃ち里まわくさりし
わかれよ何さかりけなんつま給ふ部しからてい乃て
さつ禮かくおかりて何里しおしんいふしをめてたう
らん宮しそ思ひふりしうなと係らまいるゝ殿車
ふりしこまるれよりかしてわさくしみをいふてう
めてたしと思ひ侍る給ふ法おもとをさりともかし
なるをとめともねかしめし侍らんしくんきなん
おもひ給へしやうさせしまを さし海りいこしを
思ふ為りめらかえたの杉わて小野なる事なるみいので
うけりしまるそまてあよひ乃うちふよ法法のあと
我まさてく来まさるはをいり見しをよくまをせ給りんと

なん像よくある堂の主をよ語しかゝんまてふ
ゆゝしう渇していふ事をとあるをかゝる余をさ家
うゝをなんとて素里にきしきの御さうしに
てしましゝころ西乃ひさしに不断乃御読経あるに
なとかけ奉り法師はらゐたるこそさらなる事とも達
二日ばかりありてゑんのもとにあやしきものゝこゑ
まて猶それは仏供のおろし給なんといへはいかて
まださきにはといふるをなにのいふ事のあらんと
たち出て見れハ老たる女れあうしれいみしうをまく
けすゝけたるきぬのまゝの川くとうやのやうにしてなそく
かゝりの衣珠花ひより下ゑすりのな体あるをとうや
いふ色うらむしむかしやうにておくさるをきゝそされ
のさ海すくいふなる主かあ達をなふ小事いふそ也
いへは声むさはく語ひて佛の御弟子にさふらへん
ほとけの御おろし給へと申を山法師たちのおしみこ
給といふはなやかにこそみやひの世かゝるもののこうら
をむしたるこそあはれなれうたてもはなやかなる
りかなとてこと物をくはて仏の御おろしとのみくふ
かいとたうとき事かなといふけしきを見てなとこの
こと物もくへさらむそれかさふらはねはこそとり申
つれといへはくたもののひろきもちいなとを物に
入てとらせたるにむけになかよくなりてよろつの
事を語わかき女房とも出きて男やあるいつこに
すむなと口ゝにとふにおかしき事そへことなと
すれハ哥をうたふやまひなとやするかとひもはてぬに
思ふまゝ語を夜ハ誰と寝んひたちのすけとねん寝たる

国立国会図書館　タイトル『枕草子 5巻』 請求記号 WA7-141　ガラス使用

さることよりあまたすなといとあはれなる又男山乃峯
のもみちはさそなはたつ〳〵とうしらかまへうし
かるいみしくなれわりひなくこそいはしく笑
をふまいはおほし笑ふ何とらせんといふをきうせ
おもてはしうなとかくうへそうつゝいふ事を誇させ
侍る也しそうつてこく我ゆくさきてはいつまてをきぬ
ひとりいそせてとくやわてよとおほせらるあまたを
とりて御遣状いふいつそきぬすゝめおほえ給ふくて
きよとてあけこらせうまを見しれうこくかさみそ
うちうけくまふりのか顔しくにふくくて侍入りし
後あはひ出るやつて御かえしてひくありきて
なりてむかしのをはと侍まゝりきぬ事よ給めをれ
なしすゝけらしてあまたいひちやかうりしんなと
よくむまれたる内侍のすけのいふかゝれりのなん
かさらひつけてをきたりあめかはかりしてて御かくさ
あとくめつらしやうなとを出来といふ人しけてま給
をせくきり我の人をあまたとのて見侍らんかなくれ
見物させ給へ侍とくいなくまいらにすゝめかくらひ
とらしなとわり姫をれ後又あまたるかさうのいは
あて御かなる人かきさかをみよひおもくりのなと向
母あまたを流りしくは思ひとはつまなるまたきゝ一
さ母をせよもを外れうまんを清遣とより梅行きさ
ま給とひく出ぬる我をやいひうらのをけいふあひ
て見えさうを後いはくりとみえ給とまゐり思ひ
いてん往いれのすよ日れあとれ當いとたゝうかり
き給を女房ときなとしてこのくゝさ女入侍くいと

おほくおくをおなしくは庭にまことの山をつくら
せ侍らむとてさふらひめして仰事にていへは
あつまりてつくる主殿司の人御きよめにまゐり
参りたるなともみなよりていとたかうつくりなす
宮つかさなとも参りあつまりてことくはへ興す
まし八ふ所三四人まゐりつるつかさの人を廿人
はかりになりにけり里なるさふらひめしにやり
なとすけふ此山つくる人には禄給はすへし雪山
にまゐらさらむ人にはそれなしみすれとゝめよなと
いへはきゝつけてまとひまゐるもあり里遠きは
えつけやらすつくりはてつれは宮つかさめして
きぬ二ゆひとらせてえんになけいたせるを一つゝと
りにとりてをかみつゝこしにさしてみなまかて出
うへのきぬなときたるはえさらてかりきぬ
にてそあるこれいつまてありなんと人々にの給はするに
に十余日はありなんとくこれあられなとかある
かきり申せはいかにとゝはせ給へは正月の十五
日まてさふらひなんと申を御前にもえさはあらし
とおほしめしたり女房なとはみな人ゝ年のうちはこそ
まてもあらしとのみ申にあまりとをくも申けるかな
りけれけにえしもやあらさらんついたちなとそ申
へかりけると下にはおもへとさはれさまてなくと
いひそめてんことはとてかたうあらかひつ廿日比
ほとに雨なとふれと消ゆへくもなしたけそおとりもて
ゆくとしるそ白山の観音これきえさせたまふなと
いのるもものくるほしさてその山つくりたる日式部

ガラス使用

のそうたく覚の者使すく衆里かまえんことを旅さし出
狩なといふは今月の雪山はくさせさ海りぬ所なん
かれ清なれつかみを清くらせ給へ里中し文書き劔
みを流くさせ給へ里京極殿にを清くさをいま人へ里
なといへは
あくまりのこめ侍らしゝ雪見の雪の山

ところぐにありし丑久府の卿
たしきえはかうまつりけるにはさまさりみを
乃ませ人すく人に平語侍らむとてさらに家をいとし
きあのむ宮きてしにあやしまへ入しきあしめして
いみしきよくどそ思ひつゝむとてその後の月には
りわきさにをこしちいさくなるやうなるまで宮にいと
たのくてあはれしひ家つかさえんに人々かゐぬなと
またさ家まひくちのとけおそく宮なといひきさしく
見えさりつるといへそなふかいひと出給うさるにれ
給うかいといふは何事そやといふになほかく思ふ
侍しあ里とてかのやうにまかいひ内
うらやましきをひめきれわさかうその
いかなるあまりのおふらん
宮なん思ひ侍しやといふをまくきわらひひまめを見入
猪ハ雪山まのおかゝくりあつまきそいぬる清り
おきの内侍にかくなれんといひやわたまさるなとちを
人給えてあくにを給をせさせしあまおたしたなく
て雪れ山ますそすく里清さまひくんしそいやおかし
くれとあるを又まらふゆ貴山をつくかくてやしを
久り然つ丹人らの日又雪お川を給はすまう旅うれしく

ガラス使用

又ふりつみつるかと思ふにこれはあいなしはしめのきはをはおきて今のはかきすてよと仰らるうへみそてつほねにいととうおれはさふらひのおさなるものゆのはのことあるとのゐきぬの袖のうへにあをきかみの松につけたるをゝきてわなゝきいてたりそれはいつこのそとゝへは斎院よりといふにふとめてたく覚えてとりて参りぬまたおほとのこもりたれはまつみちやうにあたりたるみかうしをこはんなとかきよせてひとりねんしてあくるいとおもしかたつかたなれはきしめくにおとろかせ給ひてなとさはするとのたまはすれは斎院より御文のさふらはんにはいかてかいそきあけ侍らさらむと申にけにいととかりけりとておきさせ給へる御文あけさせ給へれは五寸はかりなるうつち二すちをうつえのさまにかしらつゝみなとして山たちはなひかけ山すけなとうつくしけなるにかさりて御文はなしたゝなるやうあらんやはとて御らんすれはうつちのかしらつゝみたるちいさきかみに

山とよむおのゝひゝきをたつぬれは
いはゐのつえの音にそありける

御返しかゝせ給ふほともいとめてたし斎院にはこれよりきこえさせ給ふも御返しも猶心ことにかきけかしおほう御よういみえたり御つかひにしろきおりものゝひとへはすはうなるは梅なめりかし雪ふりしきたるにかつきてまいるもをかしう見ゆそのたひの御返しをしらすなりにしこそくちおしかりしゝ雪の山を

ガラス使用

まことにこしのにやあらんとみえてきえけもなし
くろくなりて見るかひなきさまそしたれとけにかちぬる心
ちしていかて十五日まちつけさせんと念すれ
と七日をたにえすくさしとなほいへはいかてこれ見
はてんとみな人思ふほとにゝはかに三日内へいらせ
給へしいみしう口惜しこの山のはてをしらてやみなん
事とまめやかに思ふほとに人もけにゆかしかりつる
ものをなといふ御前にも仰らるゝにおなしくは
いひあてゝ御らんせさせんと思へるかひなけれは
御物のくともはこひいみしうさはかしきにあはせてこもり
といふものゝついちのほとにひさしさしてゐたるを
えんのもとちかくよひよせてこの雪の山いみしうま
もりてわらはへなとにふみちらさせすこほたせて
十五日まてさふらはゝよくよくまもりてその日まて
あらはめてたきろく給はせんとわたくしにも
いみしきよろこひいはんなとかたらひてつねに
たいはん所の人けすなとにゝくまるゝ
ものなれとあやいとおほくとらせたれはうちゑみていと
やすきことたしかにまもり侍らんわらはへなとそ
のほりはへらんといへはそれをせいしてきかさらん
ものをは申せなといひきかせていらせ
給ぬれは七日まてさふらひていてぬそのほともこれかうしろ
めたけれはおほやけ人すましおさめなとして
たえすいましめにやる七日のせくのおろしなと
をやれはおかみつるなといひて笑ふ人ゝ
さとにてもあくるすなはちこれを大事にて見せにやり

やがて十日ばかりとゆきて又六尺ばかりなどといふ人はうれし
冬ばかりはま十三月の秋冬は見て冬ふれど雪はまそ
きこし思らんといふはしうくちおしいに一月をまちつけ
てとはゞおぼさぬくなげきけきく人を搔ろをし
空まらふ人のおぼさてゆくすゑ限りておぼさぬくけを
おこ法を御よはべるおぼさ猶はまくゑろうまて
おぼえいとて来るを殿まて見えはしらうたまうまに
あまて物がたりをいはせりあうわらはを盗せさく
海をわてあさはさくまでおさあひぬ御しはく給わ
らんと申せい人へはいはで冬ぞうましくいはしつがいを
まかりてもいやしく持経読くりの手入くまいらせん空
思ふをいせ仏もとなれうるひしうましくくなり
おほくなるおひつなどりさせて是はさらにかからん
きはひとりのいまそめてさゝるかしんをり象
までてなきといひくめて殿まきていやとくりさ
せてやわ侍るも此りさけてそやうせ給ひりかり
といふはいとのくまじおりしうようおく人わさ語
つらんさせんとうめきむ志川ぶあをいと浅まし
きうひなくいうふしつるならんきのふ侍りまわ
あまへんもみをよのおもんにきこえ思らん事といひ
うんすまであわわのかゝ侍るを説くを絡りは下ま
ぬる事とは城うちてかゝ絡り侍はといひはくふ
内より御使しくまく梅雪をきたふまで志川やせのさ海
をせ侍まをいと孫多くに打けまで年乃うちつ母
さらまて色はなくしやくと人くさいし外しきのふれ
夕くれをまちいとうしあし空かりんかりひのまふ師

けふまてはあまりの事になん夜のほとに人のにくかりてとりすて侍りけるにやとなんすいし侍るとけいさせよなときこえさせつ廿日まゐりたるにもまつ此事を御前にてもいふ身はなけつとてふたのかきりひきさけてもてきたりけんほうしのやうにすなはちもてきたりしかあさましかりし事ものゝふたに山うつくしう清くつくりてしろき紙に歌いみしうかきてまいらせんとせし事なとけいすれはいみしくわらはせ給ふ御まへなる人々もわらふにかう心にいれて思ひたる事をたかへつれはつみうらんまことは四日の夕さりさふらひともやりてとりすてさせしそ返事にいひあてたりしこそいとをかしかりしかその翁いてきていみしう手を

すりていひけれとおほせことにてそのさとよりきたらん人にかうきかすなさらはやうちこほたんなといひて左近のつかさ南のついちのとにみなすてゝけりいとかたくておほくなんありつるといふなれはけに廿日まてもまちつけましことしの初雪にもふりそひなましうへもきこしめしていと思ひやりふかくあらかひたりと殿上人なとにおほせられけりさてその歌をかたれいまはかくいひあらはしつれはおなし事かちたるなりかたれなとおほせらるゝ人々ものたまへとなにせんにかさはかりの事をうけたまはりなから啓し侍らんなとまめやかにうんし心うかれはうへもわたらせ給てまことに年比はおほくの人なめりと見つるをあやし

ガラス使用

思ひしなと作らせてみいきはるをうらをすさぬへまて
かちそはるいそてはつまゐらせしな世中に語りし後は
ふりつきたる事ゆ貴をうれしむかしおもひしをそれ
ほいなしとてうきまてよなとさふらひしと申せし
さまかへさせし上達部しけなるらんとう人をわらふ
勢ありしまれ

めてたきもの

からにしきかさりたちつくり佛のもくゑあひよく
はなふさなかくさきたる藤の松にかゝれる六位
の蔵人こそ猶めてたけれいみしききんたちなれと
えしも着給ぬあやおりの綾心にまかせてき
たるあを色まきうくさなといとめてたきなる所雑う
しきなとゝ人の子ともなとまて殿原乃四位五位六内を
つかさあるか下にうちゐてなにと見えさりしを蔵人
になりぬれはえもいはすそあさましきめてたきや
せんしもて参り大饗のあまくり乃つかひなとに
参りたるをもてなしやうようし給さまいつこな
りしあまくたり人ならんとこそ見ゆれ御むすめ
乃女御后おはしまし又姫君なと聞ゆるを御使にて
参りたるに御文とりいるゝよりはしめ
褥さしいつる袖くちなとあけくれ見し物ともおほえす
下かさねのしりひきちらして衛府なるは今すこし
おかしう見ゆみつからさかつきなとし給を
わか心にもおほゆらんいみしうかしこまりへちに
ゐし家のこの君たちをもけしきはかりこそかしこまれ
たまへれなしやうすうちはまたあるまくう人のちかのを

はらりせちさいなと見るをねたくさへこそおほゆ
れ御ふみかゝせたまへは御硯のすみすり御うちはを
なとまいり給へはわれつかうまつるに三とせよとせ
はかりのほとをなりあしく物の色よろしくなりの
うかとよみしうてましろえんをいふかひなき物也
かうふりえておりんするほとのちかくならんたに命より
もおしかるへき事を臨時の所々なと
申てゆとひを申しそいとくちをしけれ昔の蔵人は
ことしの春よりこそなきたちけれいまの世にはし
りくらへをなんするはかせのさえある人いとめてたし
といふもおろかなりかほにくけにいと下らうなれ
やことなき事かけまいるとも
おほいまいりし人のはかりちくのつかさまいる

へきことなとゝはせ給ひて御文の師にてさふらふはめてたく
こそおほゆれ願文へうものゝ序つくり出して
ほめらるゝもいとめてたし法師のさえあるはたいふ
へきにあらす持経者の一人して読むよりもあまたの
中にて時なとさたまりたる御読経なとなほいとめ
てたきくらう成ていつら御読経あふらおそしなと
なといひてよみやみたるほとしのひやかにつゝけゐた
たるよ后のひるの行啓御うふやみやはしめの
さほうしゝこま犬大しやうしなとをてまいりて御
ちやうのまへにしつらひすゑ内膳御竈わたし
たてまつりなとしたる姫君なと聞えしたゝ人とて露見えさ
せ給はね一乃人の御ありき春日まうてゑひ
そめのをりものすへてむらさきなるはなにもく

ガラス使用

めてたくこそあれ花もいともかみも紫の花の中にはかきつはたそすこしにくき六位の宿直すかたのをかしきもむらさきのゆへなりひろき庭に雪のあつくふりしきたる今上一の宮またわらはにておはしますか御をちの上達部なとのわかやかにきよけなるにいたかれさせ給ひて殿上人なとめしつかひ御むまひかせて御らんしあそはせ給へる思ふ事おはせしとおほゆ

なまめかしきもの

ほそやかにきよけなるきんたちのなをしすかたをかしけなる童女のうへのはかまなとわさとはあらてほころひかちなるかさみはかりきてくす玉なとなかくつけてかうらんのもとに扇さしかくしてゐたるわかき人のをかしけなるか夏の木丁のしたうちかけて白きあやふたあゐひきかさねて手ならひしたるうすやうのさうしむらこのいとしてをかしくとちたる柳のもえいてたるにあをきうすやうに書たる文つけたるひけこのをかしうそめたる五葉の枝につけたる三へかさねの扇いつへはあまりあつくてもとなとにくけなるをよくしたるひはわこ白きくそのそあたらしくもなくていたくもふりてもなきひはた屋に長きあやめをうるはしくふきわたしたるあをやかなるすたれの下より木丁のくちきかたあさやかにてひものふきなひかされたるいとをかししろきくみのほそきもかうあさやかなるのこれ高欄のわたりにいとをかしけなる猫のあかきな

ガラス使用

くひつなに白きふさつきてゆくのまのごとくひとつなりて
ひなどあるまくをなまめいたる又月乃花れおやめれ
花人はうふのうつれあうひもれ色みをかく思を
ひまくらはなどしてくまなく海とりんとうちくんたち
めなどのふらなくそのへ人侍りするをいみしうなまめ
うしろであしうひきつけくふうそのし紙を
いはれたう独のやうをとこの君たちをいとなまめ
かし六位のあを色の劔ねるとまろんしれ祭の舞人の
花のやうにまめなため宮の五せち出させ給ふに
かしつき十二人こと所には女御みやす所の人いだすをば
わろきことにぞするときくをいかにおぼすにか
宮の女房を十人出させ給ふさわを女院せう
けいしやの人やかてはらからとちなり辰の日は
青すりのからきぬかさみみなきせ給へり女房にたに
かねてさもしらせぬ殿上人にはましていみしう
かくしてみなさうぞくしたちてくらうなりにたる
ほどにもてきてきたるあかひもいみしうむすひさけて
いみしうやうしたる白ききぬにかさねのきぬを
ゑにかきたり織物のからきぬとものうへにきたるは
まことにめつらしき中にわらはゝまいていますこしなまめかし
たり下仕へまでいでゐたちてゐるかんたちめ
殿上人おどろききけうしてをみの女房とつけて
をみの君たちはとにゐて物などいふ五せちをちられ
つほねをはやあかぬまにとりはらひて
いとこやうなるをまでをかしうさるりしを
あやめとのゝさゑをせくさゑあとゝけを木下とものゝ

かゐろひゆひつゝこかきいそてたり小弁といふかあかひものとけたるをあまたとむけれハたゝやせいひ人を実方乃中将よりてつくろふにたゝならす

あし引の山井の水はこほれるを
いかなる紐のとくるなるらん

といひかく年わかき人のさるけせうのほとなれはいひにくきにやあらん返しもせすそのかたはらなるおとな人達もうちすくしつゝともかくもいはぬをと宮つかさなとは耳とゝめてきゝけるにひさしうなりけなるかたはらいたさにこと方より入て女房のもとによりてなとかうはおはするなとそさゝめくなるに四人はかりをへたてゝゐたれハよく思ひえたらんにもいひにくしまして哥よむとしりたらん人のおほろけならさらんをいかてかつゝましきこそはわろけれよむ人はさやはあるいとめてたからねとねたうこそはいへと爪はしきをしありくかいとほしけれは

うは氷あはにむすへるひもなれは
かさす日かけにゆるふはかりを

と弁のおもとゝいふにつたへさすれハ消入つゝえもいひやらねハなにとかなにとかとみゝをかたふけて問ふにすこしことゝもりする人のいみしうつくろひめてたしときかせんと思ひけれはえいひつゝけすなりぬるこそ中ゝはちかくるゝ心ちしてよかりしかのほりの御をくりなとになやましといひて入ぬる人をもの給はせしかはあるかきりむれたちてあとふと

紙をおりしそうるさけふめまつひ姫をとけまさ乃むまれかゝのむすめ深殿乃式部卿の宮は御杉とうとの御乃君は御腹十二まていとたかし昔世にてそのまゝをとひり色ふをも御八の殿御てあくうてんよりと後まて清涼殿はおの東北をそのこよひ蘇姫とさ記まてう人の御つかひ孫八来りしかと押りしかりなかそさちのひろたつけてきよけなる君のこれりてわさ殿をいせなまめかしむすさ記のりことのこてふんしてふさ前の御髪よつけまうをいせたりしたいまさみ岩乃殿ほそまくろ母兵部して見る人をおしうなかゆ遣あかつきなとれかくれ乃さいをともれいこのやうかてさいし義清筋さるなとをめつらしき見ゆ清涼殿の枕なりけりとゆひ乃むかしこいせけさやりまていそてぬまうをさ侮しくかつけくおりしうのこう人さうしわうたる人佐ゝ木しなさふし覚思ひまうをいとあとりわうの里山あひ月うけなとやまへもこ母入てくうふりもさ徹なきのこそてあわきいとおりしうう見ゆ殿上人のなをしぬ義らきて殿やなふやせひやうし母して津りけまさまとさきなことそまうつといふ哥とうさひてつか孫花乃まへわさ徹かとをゆ見しを桜ひくさらうむ人の心けハきゑ色し侮してさと一なりわうひなとあさ殿いとおそろしくの義人はうひ孫里りきね猶よりとふきよらに見ゆ志と孫なとしるたまさとゆかしく無をのかぬを女房の出ぬまうさ侮かめそしまいお孫をしくうれ前のめ里ちやうさいの

ガラス使用

時の事の蔵人いときひしうこそ申しつくいはく
諸ひ二人まうてくるかのをいるましとてあさへく
れもまくなまていへは殿上人なとは迄ひとも
あるをなとの給ふうら局にいりてかなとかきさせ
いふに京乃ゆ方の女なうた人あまたありて
あとくさうひひらう蔵人あふとをき戸越出し
あけてゆくめきいまいおきまそいひてさすちなき
来りとてふそ思ふをれのしたれありつ身てそり
ゆきともをみな入きしまいと旅ふけかうまうへなれ
たし海していはれりしと流らんしおかしまれらん
うしまらさまひの秋そいはれりしとうぬいり
ひらひさるうかとをいとらうふけ身れりうまふ
ひらやうと云ひをれは二声をとう人のりそれさら世
たまへるを見なとしてうさなとしなとさいひて了
まさはられにまさくりありしてある返りこゑかいは
とうやなとやうにゆきそいとこくのなく君を
なしとの給ひ物かうへをれいとめてめくしてゑくし
かうけいしやなとおきてゆ物語のゆねくさり
ぬうまとりいとおもしあまるゆうけ笛うそあまり
西殿のゆさほの人里とのゝふと僧都のきこえそれ
をつまうえんふたう八日のまつりのとにおもひてゆゑ
あとくとのさまふりいりくへさせをかんとあま
すきひやすきをゑゆ圏たまひの
おのへしとおほゆきくらしをとの海ま世に海う
いうしうおりしまてゆそのまゐらはれおの清ゑその名
と僧都の君をまゐらせいみしうあう

とそ思したるめるこれはしきのさうしにおはしまし
まし時のことなりうへの御まへにいなかへしと
いふ御ふえのさふらふなり御まへにさふらふものは御こと
御ふえもめつらしき名つきてそある琵琶はくゑんしやう
ほくはゐてゐけうむみやうなと又わこんなともく
ちめしほかまふたぬきなとそきこゆる水りうこ水りううた
乃法師くきうちはふたつなにくれなとおほくきゝしかと
わすれにけり宜陽殿一のたなにといふことくさは
頭中将こそし給ひしかうへの御つほねのみすのまへ
にて殿上人日一日ことふえふきあそひくらして
まかてわかるゝほとにまたかうしをまゐらぬに御と
なふらさしいてたれはとのあらはなれは
ひはの御ことをたゝさまにもたせ給へりくれなゐの

御そといふもよのつねなるうちきまたはりたるともをあま
たたてまつりていとくろうつやゝかなる琵琶に御そて
袖をうちかけてとらへさせ給へる
るたにめてたきにそはより御ひたひのいとしろうけさやかに
てはつれさせ給へるはたとふへきかたなくめてたく
ちかくゐ給へる人にさしよりてなかはかくしたり
けんもえかくはあらさりけんかしあれはたゝ人に
こそありけめといふをきゝてあるらをわけ
まうくに入て申せはわらひ給てわかれはしりたり
やとなん仰らるゝとつたふるもいとをかしめのとの
大ふのけふの日むかへくたるにたまはする扇とも
中にかたつかたは日いとうらゝかにさしたるゐ
舎人のたちなとおほくしていまかたつかたはさるへき

おかしうつきていかゝしこの万まて宮のまへいしうふりおきりけのめかる人なとかきあつかれあらねけも月に向ひても思ひ出よこゝやこゝなれ思ひしのめきゝむとこそたゝはつれ〳〵の世なし哀なるをなされは歌玉葉わてさくおほえいとあはれなれ

ねたきもの

これよりやるも人のいひたる返りことも書てやりつる後文字ひとつふたつ思ひなをしたるとみの物ぬふにかしこくぬいてつと思ひてはりをひきぬきたれははやうしりをむすはさりけるなりかへさまにぬいたるもいとねたし南乃院におはしますころにしのたいに殿乃おはしますかたに宮もおはしませはしんてんにあつまりゐてつれ〳〵なれはたはふれあそひをしわたとのにあつまりなとしてあるにこれたゝいまとみの物なり誰も〳〵あつまりて時かはさすぬひてまいらせよとてひらきぬの御そを給はせたれは南おもてにあつまりて御そのかたみつゝ誰かとくぬい出るといとみてちかくもむかはてぬふさまもいと物くるほし命婦乃めのといとゝくぬひはてゝうちおきつるゆたけのかたの身をぬひつるかそむきさまなるを見付てとちめもしあへすまとひをきてたちぬるを御せあはせんとすれははやうちかひたりけりわらひのゝしりてはやうぬひなをせといふをたれあしうぬいたりと知りてかなほさんあやなとならはこそうらを見さらん人のけにとなほさめむもんの御そなるをなにをしるしにてか

なはを人のうへのあらんせまくまさぬいのをさうむ人
になはうせよとて宰をいま殿はさりとくあらんや
とて源少納言新中将らんなどいふ事をしりうか
見やりてゐたりしあそびかりしりあまをよ
さるものからせ然りんとてとく思いへうむ人を思ふ
実しらんとおほせ世ふましのみをましなむ人まなくのへ
やりけるふ文やりたるのへくそそりけるふ殿しまゐよ
あやまちてかりとをいそて口かへうあらうひける
人めもいふ思ひたれをちしりをうら川色しれをし給
なま紀伊殿などをう人そくほかはくれるとひけり殿抱
ものきなもと引さうけてけるて知りてこいぬるあそ
まひきこう殊さりるなりしれた源しなむ人などのかなたか
ものらもせぬ抱をいえしうせいこれ空たくそこしなど
いひくいぬるいふうひなく殊さし受領などのきこそ
なめげなりのいひさりとて我をばいかく思ひけるる
ありをひみいひおやかいとねさけるなるまへさまし人
のふこ殊ひなそやかて庭よおりて見さそ歳いやまひ
ものう殊さをもいそてゆけとものまとにとまるてまんる
あそとひを出ぬへさく知ちすまもすて殊なるうすそう
たちてれなしみみを殊もこしくりいは流ふと志れひ
さひきよまこまてとやりなくなこしとうれかまうふなるて
人もはらはよりあるとえしそうひくうかそくかしぬる
後いとさむなれりなとふたてひさへきあかそうかそ
あやまくうるて返りてここかりうかひ人をほ殊ういとう
ふあきいうかむむやししそくの小く歳まて月殊た宜
おもさてそれぬぬ為りりくはなとも思ひかしやそうふれく

みえたるも猶うらなきりなとしておそろしきれを
やなきるまゝひよりてきぬ引はらるにも見ゆるしきは
あそいと猿さゝれなはしてあえるほと侮りあなと
うらいひけるよ

かたはらいたきもの

まらう人なとにあひて物いふにおくのかたにうちとけ
ことなといふをえはせいせてきく心ち思人のいたくゑ
いさうしかへておなし事したる聞ゐたるをしらて
て人のうへいひけるそれは何ともなきほとのつかひ
人なとたにいとかたはらいたし旅たちたる所にてけすとも
なとのされゐたるにくけなるちこをおのか心ち
のかなしかりしかなしさ思ふまゝにうつくし
みなそはしたまへるかまねくいひたることなと
語たるさえある人のまへにてさえなき人の物おほえ
かほに人の名なといひたることによしともおほえぬ
我哥を人に語きかせて人のほめしなとのよし
いふもかたはらいたし人乃ねきて物語なとする
かたはらにあさましううちとけてねいる人またさねたる
ひまなくのへぬ事と心ひとつやりてさやうれしく
ありぬる人はおほすてひといやしくあらうたおもむらの
さはへ養はすくあすとみあひける

あさましきもの

さしくしみかくほとに物につきあたりてをれたる車の
うちかへりたるさるおほのかなる物はところせう
ひさしきなとやあらんとこそ思ひしにたゝゆめの
ちしてあさましうあやなし人乃ためはつ

ガラス使用

りしな事はくみをなくらこをかとおいひさうろかなしれきなんと思ふ人の許はかりしてあらつ方にもくはゆるめてすゝまて拝ゐりたまふにかゝるあめいせちらのをりうとなくにうちみあけさまはひ涙はあまた思ひとあさましてうそこふとうとう禮儀飯むせきよあられ見れさうの思ひけりを人乃さしむりひくはうりもれへくをなくいひさうりのうちおし面影を浅ましのりゆゝふさなくゑくひさしうはあてまうしまうやのこそすふまてあと車へ行さる

くちおしきもの

節會佛名に雪ふらて雨のかきくらしふりたる節會さるへき御物忌にあたりたるいとなみいつしかと思ひまつ事乃さはり出きて俄にとまるをまちいてしうまれ人の子うまそゆしあ語くしたまふあそひをもし見すへき事をあるにかならすきなんと思ひてよひにやりつる人のさはる事ありてなといひてあはれ思ふちかし男も女もほうしも宮つかへところなとにおなしやう成人のもろともに寺へ詣うて物へも行にこのもしうこほれ出てようゐよくいはゝけしからあまり見くるしとも見つへくそあるにさるへき人乃うまにても車にても行あひ見すなりぬるいとくちをしわひてはすきすきしくしらんけをなとみそを人にかたりつへからんをかなと思ふもいとけしから思なめりし又月のはさうしかれとしきにありまれまれにぬるこあれまへみくさ海あるかとあとにちかりあひえるさきいきへ猛あるぬをわしつ舟すらよみ

雨かちにてくもりくらしつれつれなるを郭公の
こゑたつねにありかはやといふを聞て我も〳〵
と出たつ賀茂のおくになにさきとかや七夕のわたる橋
にはあらてにくき名そきこえしそのわたりに
なん日ことになくと人のいへはそれは日くらし
なるをといらふ人もありそこへとて五日のあした
にみやつかさ車のあないいひて北のちんよりさみたれは
とかめなき物そとて入させ給ふは四人のりて行
てもうらやましかりていま一してをなしくはなと
いへともいなと仰せらるれはきゝもいれすなさけ
なきさまにて行にむまはといふところにて人おほく
さはくなにするそととへはてつかひにてま弓
いるなりしはし御らんしておはしませとてくるま
とゝめたり左近中将みなつき給ふといへとさる
人もみえす六位なとのたちさまよへはゆかしからぬ思
事そはやくすきよとていきもてゆけはみちもまつり
のころおもひいてられてをかしかういふ所はあき
のふの朝臣の家なりけりそこもいさみんといひて車
よせておりぬゐなかたち事そきて馬のかたかき
さうしあしろひやうふみくりのすたれなとことさら
に昔のことをうつしたり屋のさまもえんのかたちて
はしちかにあさはかなれとをかしきにけにそかし
かましとおもふはかりになきあひたる郭公のこゑを
御前にきこしめさせすさはかりしたひつる人〳〵にもなと
思ふ所につけてはかゝる事をなん見るへきとて
い稲といふものを取出させてわかきけす女共の

きたなげならぬそのわたりの家むすめ女など引
ゐてきて五六人してこかせ見しらぬくるへき
もの〻ふしきなるさましてひかせてうたうたはせなとする
をめつらしくてわらふほとゝきすの歌よまんなと
しつるまきれぬへし唐ゑにあるやうなるかけは
なとして物くはせたるを見入る人なけれは家ある
しいとわろくけすゝゝしかゝる所にいりきぬる人を
ようせすはあるしなとせめいたしてこそまいる
へけれむけにかくてはその人ならんなといひてとりは
やしこの下わらひはてつからつみつるなといへは
いかてか女官なとのやうにつきなみてはあらん
なといへはとりおろしてれいのはひふしにならは
せ給へる御前たちなれはとてもてはやしまかな
なひさはくほとに雨ふりぬといへはいそきて車
にのるにさてこの歌はこゝにてこそよまめと
いへはさはれ道にてもなといひてみな卯の花いみしう
さきたるをおりて車のすたれかたはらなとにさしはさ
みふきしをゝまをひおそひ棟のうへまてさしに
かけたるやうにて見ゆるともなるをのこともゝ
をいみしうわらひつゝあしこゝをも人つきゝゝのら
はゝさらくゝしあゝあまむし人もあはなん
と思ふにさらにあやしき法師あやしのいふかひなき
のみたまさかに見ゆるにいとくちおしくてちかうきぬ
れといとかくてやまんやこのくるまのさま
をは人にかたらせてこそやまめとて一条殿のほと
にとゝめて侍従殿やおはしますは郭公はきゝ

ガラス使用

聞くいまなんかへりけるといはせたるつかひさていま
まいらむあか君しはしとなんのたまへるさふらひより
まひろけてさしぬきたてまつりつといふにまつへきにも
あらすとてはしらせて土御門さまへやるに
いつのまにかさうそくしけむおひをみちのまゝ
にゆひてしはしゝゝとおひくるともにさふらひ三
四人はかりものもはかてはしるめりとくやれといとゝいそ
かして土御門にゆきつきぬるにそあへきまとひて
おはしてこの車のさまをいみしう笑ひ給
うつゝの人ののりたるとなんさらにえ見えぬなをおり
て見よなと笑ひ給へはともにはしりつる人ともに興しあへり
ならふ哥はいかゝそれきかんとの給へはいま
御前に御らんせさせてこそなといふほとに雨
誠にふりぬなとかこと御門のやうにあらてこの
みかとしもうへもなくしそめけんとけふこそ
いとにくけれなといひていかてかへらんとすらむこ
なたさまはたゝをくれしと思ふはしりつるに人めもしらす
はしられつるをおくいかんことこそいとすさまし
けれとの給へはいさ給へかし内へといふ
ゑほうしにてはいかてかとりにやり給へかしなといふ
にまめやかにふれはかさもなきをのこともたゝ
ひいれつ一条より笠をもてきたるをさゝせてうち
見かへりつゝこのたひをゆるゝとものうけにて卯花
はかりをとりておはするもをかしさてまいりたれは
ありさまなと問はせ給ふうらみつる人々ゑし心うかりなから
藤侍従一条のおほちはしりつるかたるにそみな

わらひぬるさていつら歌はとはせ給へはかう〳〵啓
すいそれをくちおしの事や上人なとのきかん
にいかてかをかしき事なくてあらんそれきゝけ
らんにまてふとこそよまゝしかあまりきしき事
さめけらんそあやしむやこゝにてもよめいふかひ
なしなとのたまはすれはけにと思ふにいとわひし
きをいひあはせなとする程に藤侍従のはゝに
卯花につけて卯花のうすやうに

郭公なく音たつねに君ゆくと
　きかは心をそへもしてまし

返しまゐらんなとつかはすは硯とりにやりたれは出
またしてとくいへとて御硯のふたにかみなと
入てたまはりしかは宰相の君かきてさせ給へといふを

なほそこになといふほとにかきくらし雨ふりて
神をいとおそろしうなりたれは物もおほえす
たゝしにおそろしきのはさうしをしとこそみ
かうしまゐりわたしまとひしほとにこの事も
わすれぬいと久しくなりてすこしやむほとにくらく
なりぬたゝいまなほそれ返し奉らんとてとりむ
かふにも人々上達部なと神の事申しにまゐり
給へれは西おもてに出てものきこえなとするほとにまき
れぬ人はたさしてえたらん人こそせめとてやみぬ
なほこの事にすく世なき日なめりとうしていま
はいかてさなんいきたりしとふ人にきかせしな
とそわらふいまもなとそれいきたりし人ともの
いはさらんされとさもさせし思ふにこそ物しけめと

物しきをよしめしけるをいかゝしつると今
まさ侍しもとくあそ侍く給なり覚ゆれはさ侍しう候
へまはしつゝはなとの外をしりへはさてあるに二日はかり
ありてその日の事なといひ出るに宰相の君いかにそ
手つからをりたりといひし下わらひはとの給を
きかせ給て思ひ出る事のさまよとわらはせ給て
紙のちりたるに
　下わらひこそ恋しかりけれ
とかゝせ給て本いへと仰らるゝもいとをかし
　郭公たつねてきゝし声よりも
とかきてまゐらせたれはいみしううけはりけりかやう
まてにもいかてほとゝきすのことをかけつらんとて
わらはせ給もはつかしなからなにかこの歌よみ侍らしとなん思ひ侍る物の
をりの歌物はをりかなと人のよみ侍らんにもよめなと
仰らるゝはえさふらふましき心ちなんし侍るいといかゝは
文字のかすしらす春は冬の歌なとよみ秋は春乃と讀
梅の花を菊なと讀事侍らむされと歌よむといはれし末
々すこしく人にまさりてその折の歌は
これこそありけれさはいへとそれか子なれはなと
いはれたらんこそかひあるこゝちもし侍らめ露とりわ
きたるかたもなくてさすかに歌かましくわれは
と思へるさまにさいしよによみいて侍らんなん
なき人のためにもいとおしく侍るなとまめやかに啓すれは
すへてゆるさせ給てさらはたゝ心にまかす我は
よめともいはしとの給はするをいとうれしう
なり侍ぬ今は歌の事思ひかけしなといひく

こはかうらん啓させ給て内大臣殿いみじう仏御うけ
啓させの人〳〵里取うち更ゆらは起いゝして女房に
言よませの人へとみ前きしまたちゆ敷りしいさまに
宮の御前おはちをくれ猫おいしなとあとほのこ
いふをたくさうらんしてなとう申すをよまてはかま
ぬふうたへとまとひたまふとされましをはくうさ
よむましをそまて得ちを思ひつけ侍うれあとやう
なほゝす何こしいはさる事やを得りなとうくゆる
さ撥はいをわたましなゝす世よしあと時をたくす
あまひをよめなとせさせ給へときよう字を入く
いふしく人ともよくいひしてよしあしなとさきめ
らうしるしにいさしくなる御心ととりさまて給り勢
たりあけく見れはそ

たりあけて見ましかは
　まとにけて後といひて隠く君しのや
あまひのうさにてにはまてをを御
またあるとおもゆるにねりし事そたくひなきやいうしを
わらへてん何事そくおほえたくも乃たまふ
それ人の後といひてまぬ弟ゐらせて
　このよひの方をまつ換ゝよまゐらし
侍くむすなはを手申すあまとも書よりそいて
まふくこまし覚えいしつ侍りさく悪達う人人
なをとれおほよ人は候をさすへてひそしのはしらり
よりのくらて女房と猫くくりしてねうらにりの城
あけ給ふを世為るあけて見れて思ふ為しやいなや者
なうれをいふくをとり勢給へ里住まの人に物語なと

きなとするついてにもすへて人に一に思はれすは
何にかはせんたゝいみしうなか〳〵にくまれあしうせら
れてあらん二三にては死ぬともあらし一にてをあ
らんなといへは一乗の法なゝりと人〳〵わらふ事の
すちなめり筆紙なと給はせたれは九品蓮台の中には下
品といふとも書てまいらせたれはむけに思ひ
くんしにけりいとわろしいひとちめつる事はさて
こそあらめとのたまはすそれは人にしたかひてこそ
と申せはそかわろきそかし第一の人に又一に思
はれんとこそ思はめと仰せらるゝもいとをかし

中納言殿参らせ給て御扇奉らせ給ふにたかいゑこそ
いみしきほねをえて侍それをはらせて参らせん
とするにおほろけの紙はえはるましけれはもとめ侍る
なりと申給ふいかやうなるにかあるとゝひきこえさせ
給へはすへていみしう侍りさらにまたみぬほねのさま
なりとなん人〳〵申すまことにかはかりのは見えさりつと
こと高くのたまへはさては扇のにはあらてくらけの
なゝりときこゆれはこれはたかいゑかことにしてん
とてわらひ給かやうの事こそかたはらいたき物
のうちに入つへけれとひとつなおとしそといへ
侍れはいかゝはせん雨のうちはへふるころけふも
ふるに御使にて式部のせうのふつね参りたり例の
ことしとねさしいたしたるをつねよりもとをくおし
やりてゐたれはたかれうそといへは笑て
かゝる雨にのほり侍らはあしかたつきていとふ
ひんにきたなけになり侍りなんといへはなとかせん

そくまうにしてきかしめといふと友達をはまへよ
りしあうおほせらるゝにまことをたまふにはのりつる宮に給し
かさのをりとすさ給ふ海しりの歌のかみを給ふまし
とてをこいひしあそ抄しかましりなる給ふ
なめりなとくさりいとさてやうおほなさいの家
みゑ思ひなまといひくみ常のむしを給ふへなんあり
く命さのくくさゐてう勢よく命萩原の時よく蔵人
うなりけるに時しを清りはある所よたちよわて見や
ける君の思ひなるなとさう色見人こぬ覚ひを命色事
みそれをとさゝりいまし思ひゆる君なるをといひゝりける
なんくさめよにえいまでもいひのてのさう敷事をあくんと
殿上人上達部までも聞うあ敷しくにのさまひく命
又けりく命さめ思ひといひ侍までかくいひ侍めふ流を
とやかくいふ程に琵琶又御けりく覚いはせうらえを借て読
のさしりうなんふるを言もりし見れといへて読まは
さうれしと言事之けらい為ひ出さん言よとに給人と
いふまいやうさき事ひかへを給きん行部しうをあまのさ
琵琶はのうちわらんなといふおもとに浙さいをまふれ
をあなおそろしまさの出思とてきちねてもとしう
まんなをりんかなおしうかく人をわらひなとすま
をかくしてなんあるといふをたうしばくを所の
別当するはたちかまとにやわら命のあらんと勘ハ
涼やうやうなどとてあきらかなやうに仕うへしやり資かゝる
まんなのやうをりしのよみ申さしれあれと申さんしはこ見つけて
それのかさいりけりあ達のまで給かうまはゝくは
あとやうにしそある座これとそ殿上にやわたまでて

ガラス使用

人こやかて見へいこしうわうひなふま大夫たち
てこそいみしかりせうあいしや春秋ぬ来れ給の
ろすなといよくさためてたゝう思ふしくみし正月十日
まいるを給て夜の清方ふは文なとをしけうかまへ八堂
御さいめんなとをわ紀と二月十日夜の御本ふ渡里
給へむはせうそこあまたつ侍よりをは志川らひ仏
しくふみうきはくはひ女房なともはらういまくさき
秋かのつりりうふ法らせのひしつハいくたくをなくて
あけ然とうくゑてん乃ひんりし乃二間りは志川
らひを志さまつとめていとくをはかうし来れわさ
志らく暁に歸る人ひとつは車にて来れ給まつ夜を
はさうしれ南ま四尺乃ひやう婦両来に見さてく小
西ふたてくは常く三御志と孫うちをさてはたれ夜
もとり来れゝりはひやう婦の南は下れおまへ女房いて
西ほをすりふこゝのさふそ御しくしなとまいあかりと
三寺いたやを見参わしやまとり勢の人てまさいゝの
てう尺をんる供者乃月はうし様張まつりふともて
ゆまはをは給ひやう婦とのまとにふりて拔うしろ
よりみよいやうはくしなきこそや乃たまりたきハ
うれしき席しさまさまそいはしり堂思ふ女うそひ
のかくもんうさめんの御すそともすれのうち
堂る御そこへそ堂くう人多引りさ孫て参わうり
もてうたいまを三紀き夜してかりしされ今を孫被
きそゑめつるねへし御達とゆえあなとのまくけまへ
くれなれまをはて思ふをとのこ夜かれまとたく今
めてあく見こさ世給来る清それ名りてはかゝち

ガラス使用

のにほひあはせ給ぞ猶ことよき人もかうやおはしますらんとぞゆかしきさていざりいらせ給ぬれはやかて御ひやうぶにそひつきてのぞくをあしかめりうしろめたきわざときこえごつ人もありいとをかし御しやうしはひろうあきたれはいとよく見ゆうへはしろき御そどもくれなゐのはりたる二つはかり女ばうのもなめりひきかけておくによりて東むきにおはすれはたゞ御そなとぞ見ゆるしげいさはきたにすこしよりて南向におはすこうはいともあまたこくうすくてこきあやの御そすこしあかきすはうのおりもののうちきもえぎのわかやかなる御そ奉りて扇をつとさしかくし給へるいみしうけにめでたくうつくしう見え給殿は

なをしもえぎの織物のさしぬき紅の御そども御ひもさしてひさしのはしらにうしろをあてゝこなたむきておはしますめでたき御ありさまどもをうちゑみつゝれいのたはふれことせさせ給ふしげいさやの絵にかけるやうにうつくしうおほえさせ給へるに宮はいとやすらかにいますこしおとなびさせ給へる御けしきくれなゐの御そにほひ合せ給てなほたぐひはいかでかと見えさせ給御てうづまゐるかの御方のせんようてんちやうくわんてんをとほりてわらは二人しもつかへ四人してもちてまいるめりからひさしのこなたのらうにぞ女房六人さふらふせばしとてかたへはをくりしてみなかへりにけり桜のかざみもえぎこうばいなどいみじうかさみながく

しりひきてゐりはきそらいとなまめかし織
のからきぬどもこほれ出てすけまさのむまのかみの
むすめ少将乃君北野の三位のむすめ宰相の君なと
ぞちかくぞあるをかしと見るほどにこなた
の御てうづは番のうねめのあをすそごのもからきぬ
くんたいひれなどしておもていとしろくて下
づかへなどとりつぎてまゐるほどこれはたおほやけ
しくからめきてをかし御膳のをりになりてみ
ぐしあげまゐりて蔵人どもまかなひのかみあげてまゐら
するほどはへだてたりつるひやうぶをもおしあけ
つればかいま見の人かくれみのとられたる心ちして
あかずわびしければみすと木丁との中にて柱
乃もとよりぞ見奉るきぬのすそもなどみすの
外にみなおし出されたれば殿はしの方
よりはらんじ出してたそやかのみすの間より見ゆる
はとゝがめさせ給ふに少納言がものゆかしがりて侍
らんと申させ給へばあなはづかしやかれはふるき
とくいぞいとにくげなるむすめどももたりとこそ
見侍れなどのたまふ御けしきいとしたりがほなり
あなたにも御ぜんまゐるうらやましうかたがた
のみなまゐりぬめりとくきこしめしておきな女に御おろし
をだに給へなどたゞ日一日さるがう事をのみし
給ふ大なごん殿三位中将松君もゐてまゐり
給へり殿いつしかといだきとり給ひてひざにすゑたまへる
いとうつくしせばきえんにところせきひのさうぞく
のしたがさねひきちらされたり大なごん殿は

りのくしうきよあは中納殿をいせらうくしく
いろまもめてなむを見奉給り殿上人さる物まで
う人乃御しきく世こそめてたくれ浦わうこなと
やうの殿人もちんくしつ多侍らむとていそきたち侍ね
しりしあひて式部のせうなりしとかや清浦ひ
和象まうてそれりのやりとのかにまかりきくまふ清
しと孫所し御く清色をきふれとくいさゝ世のひつ
まさしと孫をとりいまぬわらは表衣の清使丹ちゐの
よりのかね集まりたりけ文とりへ入てわさ殿をわそき
えんなりきいこゑのさ乃えんにしとねさし出たり清文
ゆかりいまそあのう人衣なとはらんしわさゝ清色
ちやなとあまゐるとこゆきゐたまりぬとなふりしけ
忍待まゐりさ様をぬなめ皇ほゝ思ひ行をうゐなく
覚よりそやうの所々なとや中の人にも清抄そ奉ゑこし
あらみなりもあし打住をへ入人所いゝめて
ゝしとくなきう人をとこえの人にもおほく極丹むさて
ようせ給う人をくより給ての深ともふかく務集わ
殿人もいゆくまし留世定乃清本よりけえ紀の
織殿は与うちきその海をし出ゆ様もまて三位中将
かけおさふ蘇し帯ま思ひく立恕松妻のおもしう猶
乃たまふを誰とかく清ふけりの皇やうの殿ふ室の清
子さらとそけやたらんさり王様くを待りしけ
なとのさたまりけ所とゆよなとう今までさる事乃
とそ和よときをひつ此時もりけれえんとう条流
覚ゆふおとゝなくうちそよめなむゆう世殿人も文を
こゝろさしふかう世のつひぬ底りて清下丹ゆうきゝゐひ

ガラス使用

ぬれハ女房南おもてにそよめき出ぬらうめんさうに殿上人いとおほかり殿の御前に宮つかさめしてくたものさかなめさせよ人〻ゑはせなと仰らるまことにみなゑひて女房とものいひかはす程かたみにをかしと思ひたり日の入程におきさせ給て山井の大納言めし入てみうちきまゐらせ給ひてかへらせ給ふ殿大なこん山井大なこん三位中将内蔵頭なとさふらひ給ふ宮のほらせ給ふへき御使にてむまの内侍のすけまゐり給へりこよひはえなとしふらせ給を殿きかせ給ひていとあるましき事はやのほらせ給へと申させ給へる中さはのふまに又春宮の御使しきりにある程いとさはかし御むかへに女はう春宮のなとを参りてとくそゝのかしきこゆまつさはかの君わたしきこえ給てとのたまはすれはさりともいかてかあるとあれは見をくりきこえんなとのたまはする程いとめてたしさらは遠きをさきにしとてまつしけいしやわたり給て殿なとかへらせ給ひてそのほらせ給ふみちのほとも殿の御さるかうことにいみしうわらひてほとほとうちはしよりもおちぬへし殿上より梅の花のちりたるみその詩を誦してくろとに殿上人いとおほくゐたるをうへのおまへにきこしめしてよろしき歌なとよみたらんよりはかゝる事をまさりたりよういへると仰らる二月つこもり風いたう吹きて空いみしうくろきに雪すこしうちちる程くろ戸に殿守司きてかうしてさふらふといへは

よりまうる公任の君宰相の中将殿のとあるを見れハ
ふところかみに書く

すこし春ある心ちこそすれ

とあるハけふのけしきにいとよくあひたるを
これかもとハいかてかつくへからむと思ひわつらひ
ぬ誰々かと問へハそれ〳〵といふみなはつかし
き中にさいしやう中将の御いらへをいかてかこと
なしひにいひいてんと心ひとつにくるしきを御前
に御らんせさせんとすれとうへのおはしまして
御とのこもりたまふ殿司をとく〳〵といふけに
をそさへあらんをとり所なけれハさはれとて

そらさむミ花にまかへてちる雪と

わなゝく〳〵書てとらせていかに見るらんと思ふよ
わひしこれかことをきかはやと思ふにそしられ
たらハきかしとおほゆるとしかたの中将なと猶
ないしに申てなさんと定め給しはかりそ左兵衛督
中将にておはせしかたり給し

はるかなるもの

千日のさうしはしむる日はんひのをひねりはしむ
る月みちの国へ行人のあふ坂の関こゆる程生れたる
ちこのおとなに成程大はんにや経御誦経独して
読はしむる十二年の山こもりの初てのほる日
まきの緒をいとしく人まちわたりて抽をやいふ
さうらんともにありそめのたいやへ人てしきとよひ
よせて何しふかくほりのまゝ清うて深くこそいつく
あまたの所をしらふもれいとよくいふるあまりみそ

たりき孫のいろう人れきぬなども人よりもよくて
きこゆをあまきこしく人にきせそやなどあまそこしく
さはりひなどのあやしきさとにぶ摘やうにやが
に男二人まうきといふにひとりしてとわにまふく
きなんりのをといふにあ中し乃男や一人して二の摘
をはいわてきうへ義そ一まんりめに二まん出る
やせいふ張なてう事と志う人の奈けまとせしう
ゆうぬ人氏浄うむすて御返事とく空云とおなまく
の男やうの安にまめやくへうらは殿上乃正こと染を
何をのく思ふことかくしせうそいひさけかうてまいらう
志ゝ人の思ひ海めといふを又まらふ女院なやませ
給とそ御使は参りてきせる院の殿上人を誰くか
ゆわ御う宮人のとんいそれりまでなどや又人までを
いふはみな宮と人ゑ作てさぬる人ともそあはつる
といふを又まらふを又あやしなうすみしそあるめ
人まふよわきそわの君しそまいりのさこえんまいう
くゝ人此のさま依りそせいひ人え何事めかとて
木丁のもとによりさまそむく諸こめまよわ所人と
いふと又さいこあめりし宮なんいひ御るといひく又
まらふらそく乃中れ我さしあふゝはうもとうたい
乃うらしき様かゝて御所よ何さらしなゆさま子れい
御ようとへらまいりわ御しあゆえてう人まいい
宿りてとうたいをさうまぬあさうへをうちし紀も
御さくゆくに海しゝになしそ志んとうあさまりう
郢つ易鈔をぬ刎と也殿上の大えんえりし人を御うに
琵琶もまさひ絃をまめひとわ殺然てこそうしれ

うちまく屋なかくひたれはひまなかりしてやうを
おしくみはてさしてなきや

せきは

あふさか乃せきはすまの関しら川のせき衣のせききゝ
のをなをくりはせきさまあえ乃せきなをくうのせ
きよこえりのせきはかのせきなをかりえりたとしへ
なしやきよみかせき見るめかせきよしよしのせき
こそいかにおもひかへしたるならんとしらまほし
けれそれをなこそのせきといふにやあらんあふ
さかなとをさて思ひかへしたらはわひしかりなん
かしはりうゝのせき

もりは

おほあらきの森しのひの森こゝひの森こからしの
もりしのふの森いくたの森うつき乃森きくたの森
きくたのもりいはせ乃森たちきゝのもりときはの森
くるへき乃森かみなひの森うたゝねの森うきたの
森うへ木の森いはたのもりかうたての
たてのもりと云か耳とまるこそあやしけれもり
なと云へくもあらす只一木あるを何に付けるそ
卯月のつこもりに長谷にまうつとて淀の渡りと
云ものをせしかは舟に車をかきすへて行にさうふ
こもなとの末みしかく見えしをとらせたれは
いとなかゝりけりこもつみたる舟のありきしこそ
いみしうをかしかりしたかせのよとはこれを読
みけるなめりと見えし三日と云にかへるにあめのすこしう
ちふりしかはさうふかるとてかさのちいさきをきて

ガラス使用

まれいと苦しの承平のこゝろえなきは蓋をひやう婉
の恐ふいとよくみゆる里

湯は
なゝくり乃湯ありまのゆたまつくりの湯

つねよりことにきこゆるもの
元三は車の音鳥の聲暁乃志はぶき物のねはさら也

絵にかきてをとれるもの
なでしこさくら山吹物のかたりにめでたしといひ
たる男女のかたち

かきまさりするもの
松の木秋乃野山里山路鶴鹿冬ハいみじうさむき夏
はよにしらずあつき

清少納言巻二終

旧請求記号
195-40